

NJ 素流協 News

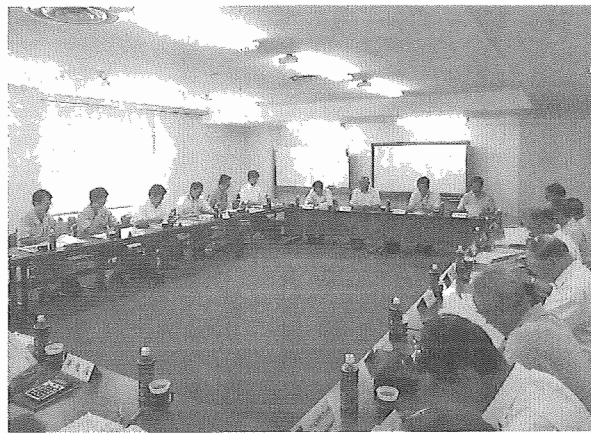
平成25年7月31日 第103号

平成25年7月31日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
 TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

平成25年度

第1回国産材利用 拡大推進会議を開催

今年度の第1回国産材利用拡大推進会議が、7月16日、盛岡市の農林会館会議室において開催された。



開会に先立ち、下山理事長は「四半期に一度の会議の一回目である。ご出席の皆様には貴重な意見を頂きたい」と挨拶した。主な報告・協議事項は次の通り。

一、NJ素流協平成25年度事業計画について

5月23日開催の第10回通常総会

において承認を受けたものである。今年度の取扱計画量は、前年度実績にプラス4万7千㎡の、25万8千㎡で、このうち1万8千㎡は木質バイオマス発電用原料である。

二、原木等の需給動向について
 ア、素流協の出荷実績と見通し

平成24年度合板用素材出荷実績の樹種比率を見ると、カラマツが48%と高い。今年度に入ってから受け入れ量が増え、山側としては出荷しやすくなっているが、工場の需要は依然としてカラマツが多く、発注量に対応しきれない状況が続くようである。アカマツ発注も増えているが、夏場はアカマツを伐れないため需要に 대응するのが難しい。

イ、合板工場等の需要動向

【ホクヨープライウッド(株)】
 7月の原木消費量は1万7千㎡、

国産材利用率は90%以上となっている。ほぼ最大の数字に近く、今後も同程度で推移するだろう。

【(株)カリヤ】

当社の床材の国産材利用率は2%と少ないが、「国産材で」という注文もあり、それについては国産材合板をベースに使用している。

【セイホク(株)】

丸太の切削量に関しては良いところまでできており、これ以上大きく増えないだろう。生産量を増やすには太い丸太を使うことだが、それでは間伐材の利用にならないのでやらない方針。9ミリ合板はスギだけでは強度が出せないが、木材利用ポイント対象の壁材は12ミリ以上と指定されており、スギが有効活用できると考えている。

【(有)川井林業】

国産集成材の引き合いが増加している。昨年度は月平均生産量7千㎡のところ、今年度は8千㎡を目標としている。乾燥設備が足りず、容積120㎡を4機増設中。年度内には1万㎡近くまでの増産

を目指す。

ウ、素材生産業者の生産動向

◎岩手県森連では、20組合中15組合が素材生産を行っている。各地域の状況によるが、現在は買取り山の生産と国有林の請負生産に入っており、来月には下刈の作業が中心となる。沿岸地域では三陸縦貫道工事や高台移転造成地の伐採事業が忙しい。これら事業地からは、A、B、C材から広葉樹まで出てくる。需要者の方々には何とか受け入れ枠を広げてほしい。

◎岩手県国生連では、5月以降造林、下刈など時期的な作業がある。現在は生産請負に入っており、手山の生産は12〜1月となる。

◎青森県国生協23社のうち、比較的機械の充実している大手4、5社が今は国有林請負に入っており、生産は若干下がる。小規模な組合員は民有林のスギ主伐が主体で、A材が30%未満と、品質が今ひとつのため苦慮している。

◎青森県森林整備協は組合員44社、うち22社が主に生産を行って

いる。国有林請負作業を年内に終わらせ、自分の山に入る予定である。スギが主体となる。

その他に供給側から次のような報告があった。

◎普通梅雨時は販売が落ちるものだが、今年度は横ばいで、丸太、チップ製品とも、量、単価とも前月と変わらない。8月、9月に丸太がどう動くか気になっている。

◎岩手県南・県中部ではアカマツ生産は終わり、秋口までストツプとなる。大手は国有林請負に入り、中堅以下の業者は針葉樹と、一部広葉樹の生産を行っている。

◎カラマツ主体の業務を行っているが、国有林入札ではカラマツ立木価格が高くなっており、まとまった量を購入するのが難しい。

二、東北森林管理局からの情報

平成25年度国有林事業量は、総収穫量271万1000m³(昨年度比99%)。主伐96万4000m³(同115%)、間伐174万7000m³(同92%)。主伐は分収造林、分収育林で、昨年度の不落物件の繰

越もある。丸太生産量は、68万2000m³(同101%)。6月末現在発注済が58万m³。丸太販売量は、前年度の越し材を含めて全部売れたとして、71万9500m³(同102%)。立木販売は国有林が58万m³、官行造林が36万4000m³となっている。

国有林の新たな取り組みとして、生産と造林を一体化した請負発注を開始した。伐採、地拵え、植え付けまでをまとめて行うことでコスト低減を目指す。秋田森林管理署湯沢支署で発注を行い、現在伐倒作業が進行中である。植え付けはコンテナ苗を使用する。

バイオマス関連事業は、現在のところ具体化しているのはわずかだが、121万m³の原料供給が必要と言われている。国有林生産の

丸太のうち、A材の出材量は30%、B材40%、C材30%の構成で、そのうちバイオマスに回るものは、従来パルプチップに回っていたC材である。D材、いわゆる枝葉は今のところ搬出できない。システ

ム販売公告に対してバイオマス材購入の申請もあるが、一定の考慮が必要だと考えている。

三、岩手県からの情報

公共施設・公共工事木材利用推進行動計画における平成22年〜25年目標は6万6000m³である。

進捗率は99%で、ほぼ計画通り進行している。実績には震災後の仮設住宅4万8000m³が含まれる。

昨年12月の衆議院選挙の選挙ポスター掲示板に県産スギを使用した市町村は全体の85%になり、利用実績は伸びている。市町村においても、木材利用に関する市町村方針を策定し、取組んでいる。

四、質疑応答

質問 工場では木材利用ポイントによる販売増加の兆し等、影響は感じられるか。

工場 製品の販売は「作ったものが何とか売れている」状況で、設備が増えなければ供給量はこれ以上増やせない。切削能力が震災前より下がっているので、逆に生産量は今が限界である。

質問 合板用素材の樹種構成は、
今後はどうなるか。

工場 以前から取組んでいる通り
スギの利用拡大に努めているが、

合板の表面材は依然としてカラマ
ツ主体で、まだ大きく変わるとこ
ろまでは実現していない。木材利

用ポイントの適用について、壁材

は12ミリ合板が条件となっている
が、このようにアイテムが変われ
ばスギの利用量が増えやすい。オ
ールスギの合板を世に出そうとい

ことで動いており、そうなればカ
ラマツの比率が40〜45%に収まる
ようになるのではないか。

質問 バイオマス向けの国有林C
材の販売方法はどうか取り決めるの
か。

森林管理局 用途の問題であるが、
現在のところバイオマス材という
形での販売は想定されていない。

事務局 システム販売で、前年度
で売れた材のうち、雪のため搬出
ができなかったものがあつた。

森林管理局 ストックヤードの利
用などを考える必要がある。発注

が遅れて請負生産が冬までかかっ
たという事情もあつた。

質問 生産と造林の同時発注の期
限はどうなっているか。

森林管理局 5月発注、8月まで
伐採と地拵え、秋に植え付けを行
う。単年度の事業である。

質問 県有林で森林経営計画を策
定したとのことだが、県行造林材

をバイオマス利用するときには、
32円対象材にならないと聞いてい
るが。

県 県行造林は、県に造林する権
利がないため、主伐の前の段階で
経営計画を廃止し、伐採を行う扱
いとなる。この問題を回避する方

策を現在検討中である。
質問 太い丸太の使用は間伐材利
用に反するとの話だが、太い材が

出てくるケースもある。大径材用
設備の新たな導入の考えはあるか。

工場 現時点で新たに計画してい
るものはない。太すぎる材も設備
の面では困る。工場の設備にマツ

チした材をそれぞれの工場で仕入
れたいと考えている。

トピックス

第1回東北森林管理局国有林材 供給調整検討委員会開催される

7月23日、秋田市の東北森林管理局
において、平成25年度第1回東北森林
管理局国有林材供給調整検討委員会が
開催された。木材価格急変時に国有林
材の供給を調整し、価格の急激な変動
を緩和するために設置されたもので、
四半期に1度開催される。

委員には、管内東北5県の森組連合
会、木産協連合会、大学木材研究所等
から役職者計8名が委嘱され、当NJ
素流協からも高橋常務が出席している。
市況調査の結果、木材価格が前月や前
年同月より大幅に変動したり、数ヶ月
間に渡って下落あるいは上昇するとい
うような状況がいくつか該当する場合、
供給調整の必要性ありとして、実施方
法を検討の上、局長に報告する。今回
は供給調整は必要なしとの結論となっ
たが、出席した委員から、「復興需要
が感じられない。工場の受入調整もあ
り、買い手市場となっている」などの

意見が出された。

岩手県森林経営計画システム・ 造林補助システム運用始まる

岩手県は、森林経営計画の作成と認
定を支援する「岩手県森林経営計画シ
ステム」の運用を6月から開始した。
これは、県が管理する森林簿のデー
タを利用して森林経営計画を作成する
ソフトで、伐採量や間伐計画が認定の基
準に適合するか確認しながら計画の作
成ができるものである。

また、7月からは「造林補助システ
ム」の運用を開始した。これは、森林
整備事業の補助金交付申請書を作成す
るソフトで、「森林経営計画システム」
とも連動しており、補助事業で実施し
た間伐等の施業に係るデータを、森林
経営計画の実行管理に反映させること
が可能となった。

森林所有者や林業事業者等が当シス
テムの利用を希望する場合は、県森林
整備課又は各広域振興局の林務担当課
に申し込む必要がある。森林簿データ
を使用するためには別途手続きが必要
になる。システム使用料は無料である。

丸太受入検査を実施 〜ホクヨープライウッド工場

7月23日(火) ホクヨープライウッド(株) (宮古) にて、出荷された

丸太の受入検査を実施しました。今回は、同社の協力を得て、

資材担当・伊香氏とNJ素流協小野寺、扇柳の3名にて行いました。

検査は事前予告をせずに、工場へ搬入された3業者3台分の丸太

について、木口に表示されている径級が正しいか、納品書の明細と現物との相違がないか、丸太の長さや曲がり規格の範囲内に納まっているかなどについて、全数調べました。

検査結果の概要は、表1の通りとなりました。今回、木口割れの素材を納入した組合員へは、造材の際は十分注意し、規格を順守するよう直接指導を行いました。

搬入した丸太の木口に表示されている径級が実際の径級と違っているものが若干見られましたが、全体的に表示径級より実測径級が上回る傾向にありました。また、本数についても納品書より実際の本数が多く、結果的に合板工場へ

損害を与えていないことが確認できました。しかし、丸太の長さにおいて実測値が規格よりも若干長い傾向にあり、さらには1本だけ規格より1cm短いものがありました。また、軽微ではありましたが、直径10cmの大節があるものや、節袴、曲がり、根張り等の不適合のものも若干見受けられました。重大な不適合としては、1本だけ木口(元口)の割れが見受けられました。

表1 検査結果

組合員	納品書記入	径級	長さ	曲がり	腐れ	大節	その他
A社	○	○	△	○	○	△	
B社	○	○	△	△	○	△	根張・節袴
C社	○	○	△	○	○	○	木口割れ

※ ○…適合、 △…軽微な不適合、 ×…不適合

表2 合板用丸太規格

1. 長さ	
【2m】	1.95~2.05m (検知は2.00m)
【4m】	4.00~4.10m (検知は4.00m)
2. 径級	末口直径14cm以上、元口直径60cm以下。
3. 曲がり	内曲面の最大矢高の割合が2m材で末口直径の10%以下、4m材で同20%以下。
4. 大節 (直径8~10cm)	
①	大節は節袴をいれて直径10cm以下 (生き節)。大節の数は2m材で5個、4m材で10個まで。特にアカマツの輪生している大節は3個まで。
②	死に節は直径7cm以下。
③	アカマツ等のコブは丸太の面なりに平らに切り落とす。
5. とび腐れ	変色のみで木質繊維が健全であれば、可。
6.	引き抜け、目まわり、芯腐れは不可。
7.	根張りは必ず切り落とすこと。 リングバーカー (皮剥ぎ機械) が処理できる丸太の最大径は60cm (末口⇄元口) の径級格差を小さくするよう、根張りを切り落とす。



写真1 検査のために材を並べる



写真2 1本ずつ検尺、検品

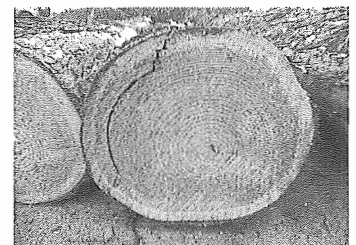


写真3 不適合となった木口の割れ

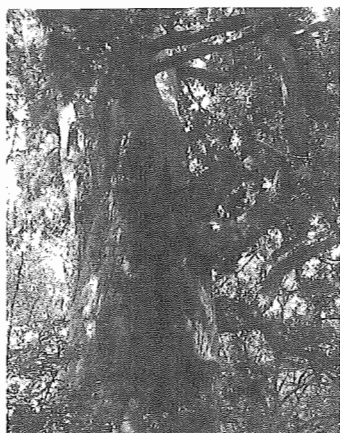
今月の名木・巨木 14 (北上市)

北上市指定天然記念物

仙人峠の姥スギ

指定…1982年2月25日

所在…北上市和賀町仙人続山国有林



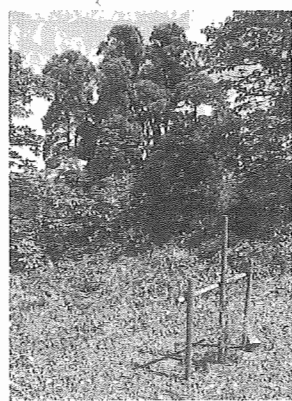
北上市和賀町と和賀郡西和賀町(旧湯田町)を結ぶ国道107号線沿いに「秀衡街道」と名づけられた古道があり、奥州藤原氏の時代には、秋田県横手地域や岩手県和賀地域で産出する金を平泉に運ぶ「黄金の道」として重要な役割を果たした。

JR北上線の和賀仙人駅から国道107号線を西に進み、和賀仙人橋の手前を左折して事業所敷地内の道路を右手側に進み駐車場を過ぎると、まもなく「仙人山登山入口」の看板がある。ケヤキやト

チ、ブナなどの大木を眺めながら登山道を1時間弱歩くと、思わず「おおつ」と声を上げたくなる巨木、仙人峠の姥スギが現れる。

樹高30メートル、幹周り11・5メートル、樹齢約900年とされ(現地案内板より)、久那斗神社奥宮の御神木である。2000年には林野庁により「森の巨人たち百選」に選定された。

幹は3本に分かれ、枝が他の幹に食い入る「連理」の形態を成すことから別名「レンリ杉」とも呼ばれている。2004年に幹の一本が枯損していることが明らかになり、樹勢の衰えが危惧された。そこで和賀仙人姥スギ保全協議会が中心となり、独立行政法人林木育種センターが実施するサービス「林木遺伝子銀行10番」を利用して、2005年に姥杉



姥スギと姥スギ2世

の枝を採取し、同センター東北育種場(滝沢村)においてクローン苗の増殖が行われた。これらは2009年に里帰りし、同市の国有林内「仙人姥スギの森」に植樹されたほか、今年6月には「きたかみ巨木の会」(平賀昭士会長)により、スギを見下ろす位置に「姥スギ2世」とし

て2本の苗木が植樹された。今から273年前、姥スギが伐採の危機にさらされた際、当事の山口村、岩崎村、横川目村の農民一同が伐採中止を嘆願した古文書が残されている。時を隔てた今もなお、姥スギは住民の心にしっかりと根付いている。

冗談欄 「虫食いの勧め」

地球上には多くの多様な生物が生きており、約175万種といわれる。

このうち植物が27万種で、残りが動物。動物の内訳は哺乳類6千種、鳥類9千種、昆虫95万種と、昆虫が圧倒的に多い。

そのせいか、国連食糧農業機関(FAO)が人口の爆発的増加に対する対応策として、昆虫食を提案した。

昆虫は蛋白質や脂肪、ビタミン、食物繊維などが豊富であり、有用な栄養資源として高く評価される。

アジアやアフリカなどの世界で20億人以上が虫を食べており、カブトムシなどの甲虫、イモムシ、アリ、ハチ、バッタやコオロギ等であり、日本ではイナゴとハチの子が有名である。

特に海のない長野県では蛋白源としてのハチの子取りが古くから行われており、巣を見付けるため真綿を付けた肉団子をハチに運ばせ、大の男どもが川や田んぼも関係なく追いかける姿は男のロマンさえ覚える。

今、世界中で食べられている昆虫はすべて野生のものである。

虫1kg得るための餌は2kgですみ、牛肉1kg得るための餌8kgの4分の1で済むことから、FAOは飼育して大いに食べるべきであるとしている。

問題は食べる時の抵抗感であるが、本来、人間は食欲な生き物であり、ホヤやナマコを最初に食べた人に比べたら、その気にさえなれば、昆虫を食べることなんていとも簡単なことのように思えてならない。

猛暑やゲリラ豪雨、異常気象続きの日本列島グルメなんて浮かれて居られない時代が来るかもしれない。

そこで、虫の好かない者でも、例え、虫の居所が悪い時でも、飼育の虫となつて、悪い虫が付かないように育て、虫も殺さぬような顔をして食べて、腹の虫をおさめなければならなくなるだろう。

(線部は虫の付く言葉でした。オソマツ)

平成25年7月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約770m³減少、カラマツが約310m³減少、アカマツが約380m³増加し、全体では約620m³減少している。昨年同月と比較すると、スギが約1,660m³増加、カラマツが約980m³減少、アカマツが約2,040m³増加し、全体では約3,070m³増加している。今月のシステム販売取扱はなかった。
- 2 その他(合板用以外)の出荷量は前月より約1,100m³減少、昨年同月より約890m³減少している。
- 3 今年度の年間計画量258,000m³に対する出荷量の割合(目標達成率)を33%とすると、今年度の全体出荷実績は、計画数量を3.6ポイント下回る結果となった。

樹種	長級(m)	当 月 出 荷 量			今 年 度 累 計		
		合板用	その他製材用等	計	合板用	樹種別割合(%)	その他製材用等
スギ	2.0	3,495			14,563		
	4.0	1,579			7,882		
	計	5,075	2,545	7,620	22,445	39.4	12,496
カラマツ	2.0	3,993			15,763		
	4.0	1,705			6,198		
	計	5,698	954	6,652	(739) 21,960	38.6	3,722
アカマツ	2.0	1,962			9,513		
	4.0	1,365			1,863		
	計	3,327	197	3,524	11,376	20.0	1,577
その他針葉樹		349	776	1,126	1,121	2.0	1,574
広葉樹		0	57	57	0	0.0	241
合計		14,448	4,530	18,978	(739) 56,903	100.0	(739) 19,610
目標達成率(%)							29.7
計画数量							258,000

() はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

ある雑誌の巻頭言で沖大幹東京大学教授のインタビュー記事の見出し「水「輸入」大国ニッポン」を目にした。本当なの？一瞬眼を疑った。外国産の飲料水、ペットボトルをコンビニで買ったことはあるけれども、日本が水の輸入大国とは寡聞にしてちっとも知らなかった。この先生の言っている大意は次のとおりである。

「この国が水に恵まれているという前提は幻想に過ぎない。例えば、関東地方でみた場合、飲料水については(ダム建設等によって)渇水の危険性は低くなっているが、日本人が消費している水は国内の供給量を大きく上回っており、海外に依存している世界一の水輸入国である。日本が輸入しているのは飲料水ではなく「食べる水」である。それは、カロリーベースで60%の食料を輸入していることがその食料を生産するための水を間接的に輸入しているということである。食料という形に変えて日本に必要な水(仮想水)を年間6百億〜8百億トン輸入している計算になる。(食料輸入に伴う)仮想水貿易は、わが国に十分な経済力があれば、仮に干ばつが起きても究極高値で買うことができる。しかし今後は、外国では水の使い方が問題になってくる。例えば、飲料水を枯渇させたり、水の汚染によって環境に負荷を与える利用法が国際的に監視されようとしている。水に関して人間の活動によってどれだけ環境に潜在的な影響を及ぼすかを定量化しようという試みが国際標準化機構(ISO)で始まっている。具体的には、地元地域住民の健康や生

態系に深刻な影響を与えて生産された食料だということが判明すれば、不買運動が起こる可能性がある。また、世界各国で水資源をめぐる争いが続いているが、そうした事例が対岸の火事ではないことを理解すべきである。途上国の生活レベルが向上することによって、今後世界が必要とする水は確実に増加する。わが国の政治家や企業経営者、さらには国民全体が、日本が水を海外に依存していることを「リスク」として正しく認識すべきである。」

この記事を読んで、森林・林業に関わっている落穂拾い子は考え込んでしまった。森林は水源かん養機能を有するといわれ、わが国の森林全体の水資源貯留機能を貨幣に換算すると年間に約8兆7千億円とも試算されている。しかし、水は究極的にはローカルな資源であり、九州や北海道の水を大量に大阪、東京に運ぶのはコストが見合わないであろう。

森林の有する水源かん養機能を十全に発揮させ得る森林管理の在り方とはどういふものなのか？水源貯留に望ましい森林とは、降水量の増加、地表流下の緩和、浸透・保水の増加、蒸発の抑制の機能が大きく、降水の遮断や蒸散増加の機能が小さい森林であるという。先に述べた「水はローカルな資源」であることを大前提に置いて、森林の木材生産機能を高めることと水源かん養機能を十分に保持していくこととの関係を考えるとき、地域ごとの農業、工業、人口集積度を勘案して森林の木材生産機能と水資源かん養機能の両者をバランスさせる具体的な森林管理の最適化施策方法を検討する必要があるろう。